

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 小山 裕

本論文は、ニクラス・ルーマンの社会学理論についての研究であるが、多くの既存研究のように社会的システム理論に焦点をあてるのではなく、「機能分化」概念を中心に組み立てられた彼の社会学理論の思想史的意義を解明することを目指したものである。

全体は、序章と終章を含め全8章からなる。序章では、上記の課題を定式化したのち、そのための分析枠組みとして、初期ドイツ連邦共和国における「国家と社会の区別」をめぐる論争という共時的連関、およびカール・シュミットとの対抗関係という通時的文脈の二つを提示し、ルーマンの社会学は、法律実証主義批判という局面ではシュミットと問題意識を共有するものの、機能分化社会という近代社会像においてはシュミットの全面国家概念と対立し、ルーマンにとってはシュミットの企図を全面的に刷新するため、デモクラシー概念の再定式化が鍵であったという作業仮説を導出する。

第1章は、国家と社会の自由主義的区別という市民的自由主義の代表者であるロベルト・フォン・モールの国家理論および社会理論の展開を追跡し、そこには個人による自由な利益の追求の擁護という一貫した主題が存在することを論証している。第2章は、国家と社会の区別を「分化」概念によって捉え直したゲオルク・ジンメル『社会的分化論』が、モールの理論的営為と目的を同じくすることを確認しつつも、ジンメルの議論には市民的自由主義の社会的転換と評しうる新しい特徴がみられると論じている。第3章では、シュミット理論と戦間期の新自由主義者らによるその受容とが分析され、私的な自由が可能になる空間を創出するために、個人を超越する強い国家としての全面国家を召喚せざるをえなくなる様が明らかにされている。

以上の思想史的探求ののち、第4章からルーマンの社会理論を分析する。第4章は、ルーマン社会学の代名詞である「社会的啓蒙」の原像が、フッサールの実証主義批判を独自のしかたで継承した実証主義的公法学批判を契機としていると論じる。第5章は、戦後の国家と社会の区別をめぐる論争におけるハーバーマスやスメントらの議論を概観した上で、ルーマン社会理論の独自性が、19世紀の自由主義的市民社会の社会構造を機能分化という新たな概念で捉え直した点にあると論証している。第6章は、1970年代以降のコード概念の洗練とオートポイエーシス概念といったシステム理論的展開が、その政治理論への取り組みに負っており、そして、シュミットの「同一性」ではなく、「差異」を軸にしたデモクラシー概念を進化論的かつ構造論的に再構成した点に、「社会的啓蒙による市民的自由主義の批判的継承」というルーマン社会理論の企図の一つの到達点が見出せると論じている。終章は、全体の議論を踏まえた上で、ルーマンの社会理論が市民社会の史的省察を通じて「社会構想としての社会学」を展開しうる有効な手がかりとなりうると展望している。

以上のように、本論文は、ルーマン社会学理論を近代ドイツ社会理論の思想的文脈において解明するという、既存のルーマン研究を大きく凌駕するきわめて独創的な研究水準を達成している。

よって、本審査委員会は、本論文が博士（社会学）の学位を授与するに値するとの結論をえた。